

Reflection X Advantage の評価



Micro Focus<sup>®</sup>  
Reflection<sup>®</sup>

---

# Reflection X Advantage の評価



# 目次

<b>Reflection X Advantage: 次世代のX サーバ</b>	<b>5</b>
Reflection X Advantage の機能	5
機能の比較	6
ご自分の目でお確かめください	8
<b>単独モードでのX マネージャの使用</b>	<b>9</b>
X クライアントの起動	10
クライアント定義の複製	13
別のユーザとのセッションの共有	13
低速ネットワークでのパフォーマンス向上	14
ショートカットの作成	17
<b>ドメインモードの使用</b>	<b>17</b>
サンプルドメインの設定	18
管理コンソール	19
認証	19
Windows 資格情報を使用した認証	20
Reflection X 内部認証の使用	20
公開セッション設定の作成および使用	21
X マネージャ (ドメイン接続用) の開始	21
設定の公開	21
公開設定での新規ユーザの開始	23
ドメインモードでのセッションの共有	24
別のユーザにセッションの使用を許可	24
提供セッションへの参加	25
ドメインモードでのリモートセッションサービスの使用	26
ドメインノードの設定	26
リモートセッションサービスを使用したリモート作業	27
特別なセッション保護の適用	28
ネットワークパフォーマンスの最適化	29
<b>Reflection X バージョン13 または14 からのアップグレード</b>	<b>29</b>



## Reflection X Advantage: 次世代のX サーバ

Micro Focus の Reflection X Advantage は、地理的に分散した現代の組織およびIT 環境向けに最適化された新しい X サーバです。Reflection X Advantage は、Reflection Desktop for、Reflection Desktop Pro に付属し、Reflection X バージョン 14.x をご使用の保守契約をされればお客様も無償で入手できます。

Reflection X Advantage には、単独モードとドメインモードの2種類の動作モードがあります。このガイドでは、両方の動作モードをテストします。

### Reflection X Advantage の機能

単独モードは、既定でインストールされる単一のアプリケーションである X マネージャで提供されています。以前の Reflection X 製品のユーザにとっては、単独モードの Reflection X Advantage ( ミッションクリティカルな X アプリケーションに確実かつシームレスにアクセスできるようにするバレットプルーフ X サーバ ) はなじみの深いものでしょう。

ドメインモードは、単独モードで使用可能なすべての機能と、追加のコストを発生させずに生産性を向上させるための補足機能を提供します。ドメインモードは複数のコンポーネント ( X マネージャ (ドメイン接続用)、X 管理コンソール、および Reflection X サービス ) で構成されます。これらの機能は既定でインストールされません。また、ドメイン内のシステムごとに、別々のコンポーネントが必要です。

どのモードを選択しても、次の機能にアクセスできます。

- **複数のプラットフォームに対応** Reflection X Advantage を使用すると、過去最多の種類のデスクトップ環境 (Windows、Linux、Solaris、HP-UX、AIX など) から X ホストと X アプリケーションにアクセスできます。
- **リアルタイムの共同作業** Reflection X Advantage のセッション共有機能によって、同僚が同じアプリケーションを同時に見たり、1人のユーザからほかのユーザにセッションの制御を転送したりできます。
- **パフォーマンス向上のオプション** Reflection X Advantage を使用すると、リモートセッションサービスを使用して狭帯域幅や遅延の多い接続の問題を解決できます。Reflection X Advantage の分散セッションを構成する際は、表示の更新に必要なプロトコルのみがネットワーク経由で送信されます。このため、遅延の多い場合のパフォーマンスが大幅に向上します。低帯域幅の問題である場合、Reflection X Advantage はリモート X サーバに送信されるプロトコルを自動的に圧縮します。
- **FIPS 140-2 検証に対応した完全統合 Secure Shell**: Reflection X Advantage を使用すると、X サーバと統合されたシングルベンダのセキュリティソリューションを利用できます。
- **X11 の拡張機能に対応** Reflection X Advantage は、GLX、Render、Damage、Shape、XF86 などなどの主要な X11 の拡張機能に対応しています。
- **全角文字を入力するためのネイティブIMEに対応** ネイティブIMEへの対応により、ご使用のワークステーションの入力方式エディタ (IME) を使用して (日本語、韓国語、中国語などの) 文字を構成できます。Reflection X Advantage の XIM (X11 Input Method) サーバは、構成されたテキストをIMEから取得し、XIM対応クライアントに送ります。このため、新しい入力方法を習得しなくてもさまざまなXクライアントで作業できます。
- **X.509 証明書の検証** Secure Shell 接続には、ユーザ認証とホスト認証の両方が必要です。Reflection X Advantage は、ユーザ認証の標準オプション (パスワードと公開鍵) のほか、X.509 証明書を使用した認証にも対応しています。証明書は、Reflection X Advantage ストア、ローカルディレクトリ、Windows 証明書ストア、スマートカードなどのデバイスに保存できます。また、Reflection PKI Services Manager をダウンロードしてインストールすると、X.509 証明書を提示するホストを認証するように Reflection X Advantage を構成できます。Reflection PKI Services Manager は、助成金なしで入手できます。

ドメインモードで使用できる追加機能は次のとおりです。

- セッション構成の一元化** Reflection X Advantage  
 のドメイン機能によって、エンドユーザのセッション設定が簡単になりました。管理者は1  
 つの場所で一元的にクライアントとセッションの定義を作成して保持し、ユーザに対してこれらの定義へのアクセス  
 を許可できます。ユーザはこのように一元的に構成されたセッションを使用することで迅速な作業を開始できます。  
 また、自分のワークステーション上で各セッションを作成、構成することができます。
- 会社や自宅、外出先などからの確立されたセッションへの柔軟かつ迅速なアクセス**  
 ある場所でセッションから抜け、別の場所からそのセッションに再び参加できます。  
 クライアント接続の再確立に時間がかかりません。
- セッションの保護**  
 分散セッションを実行する際、フェイルオーバーを使用してセッションが失われぬように保護できます。このオ  
 プションを有効にすると、ネットワークまたはハードウェア障害が発生した後も、セッションから抜けず時点に戻  
 って作業を再開できます。
- ドメイン認証サービス** 現在の認証プロセスを利用して、Reflection X Advantage  
 のドメイン認証を行います。次のいずれかの認証方法を使用します。Windows、PAM (Pluggable  
 Authentication Modules)、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)、および  
 Reflection X 内部
- 負荷分散** 分散セッション環境では複数のコンピュータにReflection X Advantage  
 がインストールされるため、セッションを複数のドメインノードで実行できます。セッションが開始されると、その  
 セッションは最も負荷の少ないドメインノードで実行されます。

## 機能の比較

	単体モード (X マネージャ)	ドメインモード (X マネージャ(ドメイン接続用))
X クライアントアプリケーションの起動お よび操作	X	X
XDMCP	X	X
X セッションの共有	X	X
X11 の拡張機能への対応	X	X
低速ネットワークでのパフォ ーマンス向上	X	X
統合された Secure Shell	X	X
FIPS 140-2 への対応	X	X
X.509 証明書の認証	X	X
ネイティブIME サポート	X	X
設定の一元的な構成場所		X
X セッションからの退出および再参加		X
X セッションのフェイルオ ーバー		X

ドメイン認証サービス		X
負荷分散		X

## ご自分の目でお確かめください

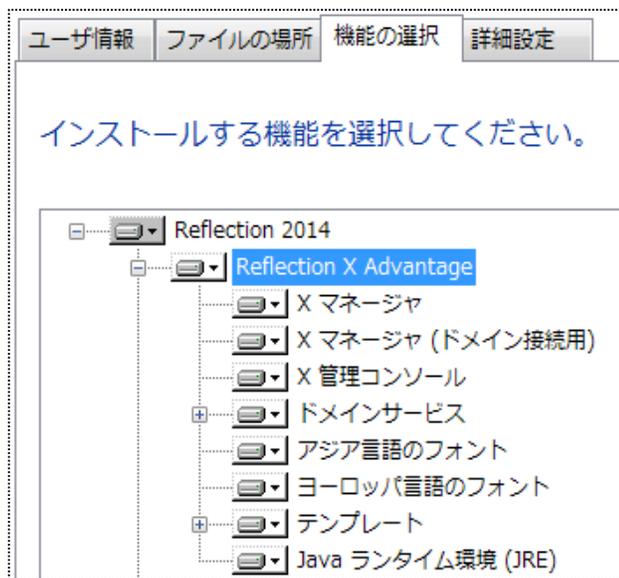
Windows システムの場合は、以下の製品のインストールにReflection X Advantageが含まれています。評価版コピーを無償でダウンロードおよびインストールできます。

- Reflection Desktop for X
- Reflection Desktop Pro

このガイドの情報を補完するため、Reflection X Advantageのマニュアルページから完全な製品マニュアルを入手できます (<http://support.attachmate.com/manuals/rxa.html>)。

### 評価版コピーをダウンロードおよびインストールするには

- 1 PC X サーバ 製品ページで評価版コピーを申請します (<http://www.attachmate.com/Products/PC+X+Server/pcxserver.htm>)。製品の申請フォームに入力した後で、ダウンロードライブラリへのリンクが記載された電子メールを受け取ります。
- 2 電子メールのリンクをクリックして、評価版パッケージをダウンロードします。
- 3 パッケージをダウンロードして実行すると、インストーラファイルを解凍する場所を指定するよう求められます (最終的なプログラムファイルの場所ではありません)。ファイルを解凍する場所を選択して、**[次へ]** をクリックします。指定した場所にファイルが抽出され、Reflection インストーラが自動的に起動します。
- 4 インストーラは、システムの必要なソフトウェアの前提条件を確認します。必要なソフトウェアの前提条件が存在しない場合、インストーラは製品のインストールを実行する前にこれらのパッケージをインストールします。
- 5 この画面では、このコンピュータにすべてのReflection X Advantage 機能をインストールします。**[機能の選択]** タブで、**[Reflection X Advantage]** の横にある機能の選択ボタンをクリックして、機能をローカルのハードディスクドライブにインストールするを選択します。これにより、自動的にすべての機能がインストールするよう選択されます。



注意 単体のX マネージャを使用してX

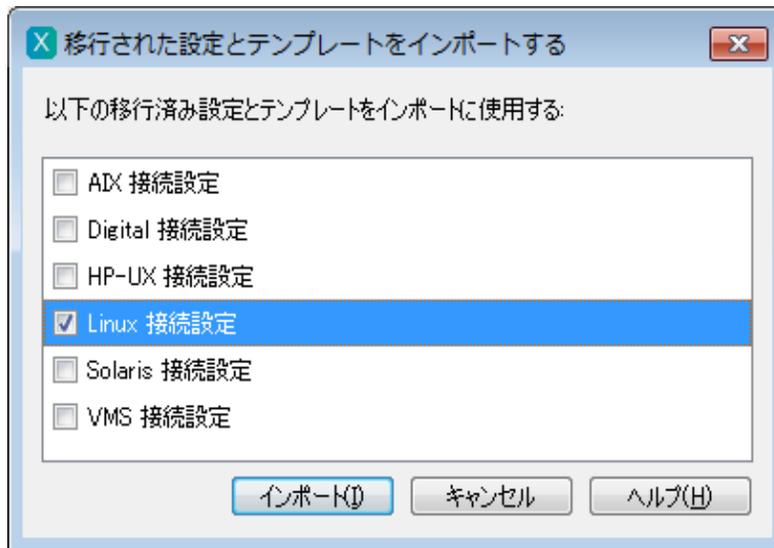
クライアントを接続するために、必要となるのはこのコンピュータだけです。このガイドに記載されているすべての機能を評価する場合は、別のシステムにReflection X Advantageのいくつかの機能をインストールすることになります。詳細は、後の手順に記載されています。

## 単独モードでの X マネージャの使用

X クライアントに最もすばやく接続するには、単体の X マネージャを使用します。X マネージャは、X セッションを構成して起動するツールで、操作はとても簡単です。

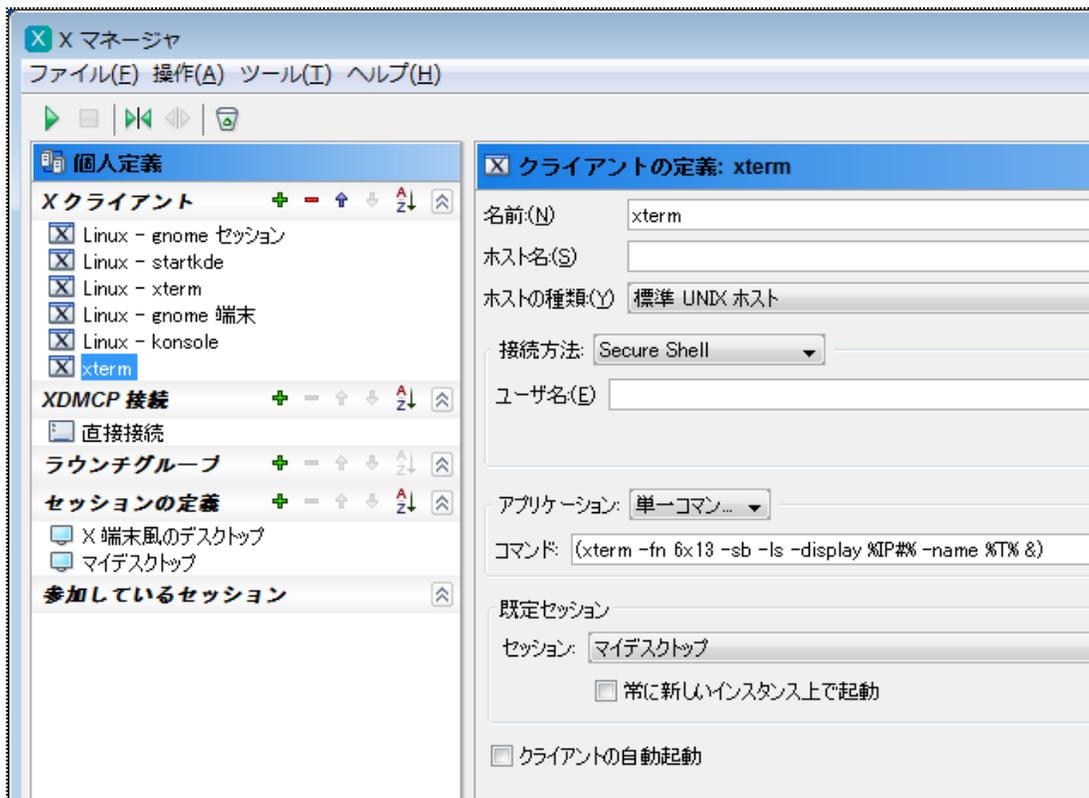
### X マネージャを起動するには

- 1 Windows の[スタート]メニューから、**[すべてのプログラム] - [Micro Focus Reflection] - [X マネージャ - Reflection X Advantage]** を選択します。
- 2 X マネージャの初回起動時には、**[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには、さまざまな種類のホスト向けに用意されたサンプル接続設定のリストがあります。実行中のシステムに、以前の Reflection X 製品 (通常はバージョン 13.x または 14.x) または Hummingbird Exceed で使用していたローカル設定がある場合は、移行した設定も表示されます。



- 3 既定では、すべてのサンプル接続設定が選択されます。使用しない種類のホストについてはチェックを外してください (上記の例を参照)。移行した設定をインポートするオプションが表示されている場合は、このオプションを選択したままにします。
- 4 **[インポート]** をクリックします。X マネージャが起動し、選択した設定がインポートされます。

X マネージャを開くと、2 つのメイン領域 (左側のナビゲーション画面と右側の定義画面) に分かれた画面が表示されます。左側に表示されている定義は、**[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスで選択した項目に従ってインポートされたものです。左側の画面でエントリを選択すると、その定義の説明が右側の画面に表示されます。



上の例ではxterm クライアント定義が選択されており、ここから最初のX クライアント接続を開始します。

## X クライアントの起動

最初のクライアント接続を開始するには、以下の手順に従ってください。最初の手順では、既定の「xterm」サンプル定義を使用します。2

番目の手順では、ご使用のホスト用にカスタマイズされたサンプルテンプレートを使用します。3

番目の手順では、サンプルを使用せずに新しいクライアント定義を作成する方法を説明します。これらの手順のうち、いくつか試してみることをおすすめします。

---

ヒント: 接続が完了したら、クライアント定義を複製して(13 ページ)、ほかの接続を構成する際の基本として使用できます。

---

## サンプルのxterm 定義を使用して接続するには

ご使用のホストでSSH サーバが稼働しており、xterm コマンドが利用可能で、スクリプトがある場合は、このサンプル定義を使用して接続できます。

- 1 X マネージャの左側の **[X クライアント]** の下から、サンプルの[xterm] 定義をダブルクリックします (ここに表示されるほかのオプションは **[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスで選択した項目によって異なります)。



- 2 最初のプロンプトに従って、ホストとユーザ名を入力します。
- 3 ホストが有効でSecure Shell 接続に対応している場合は、初回接続時に**[不明なホスト鍵]** というメッセージが表示されます。ホスト鍵を信頼する場合は**[常時]** をクリックします。Reflection X Advantage はこの鍵を保存し、この後の接続時にユーザが正しいホストに接続していることを確認するために使用します。

---

注意: 以前のバージョンから設定を移行した場合は、既存のホスト鍵が移行されており、この不明なホストのプロンプトが表示されない場合があります。

---

- 4 プロンプトに従ってパスワードを入力します。  
接続が成功すると、デスクトップウィンドウが開き、ホストのコマンドプロンプトが表示されます。

## ホストの種類に合わせたサンプル定義の1つを使用して接続するには

特定のホストの種類で一般的なX クライアントを起動するには、ホスト固有のサンプル定義を使用します。これらの接続も既定でSecure Shell を使用します。

- 1 X マネージャの左側の **[X クライアント]** の下から、ご使用のホストの種類用にインポートされたサンプル定義の1つをダブルクリックします。例えば、下の例ではLinux - gnome セッション定義が選択されており、Linux デスクトップを表示する接続が開始されます。



- 2 最初のプロンプトに従って、ホストとユーザ名を入力します。
- 3 このホストに接続したことがない場合は、初回接続時に**[不明なホスト鍵]** というメッセージが表示されます。ホスト鍵を信頼する場合は**[常時]** をクリックします。

- 4 プロンプトに従ってパスワードを入力します。

接続が成功するとウィンドウが開き、選択した X クライアントディスプレイが表示されます。

X クライアントが表示されない場合は、X

マネージャウィンドウ下部のステータスバーの情報を確認してください。クライアントが X

サーバに接続できなかったというメッセージが表示されている場合は、クライアントの定義で指定されているコマンドにホストが対応していません。ほかのサンプル定義を試してください。

### サンプルを使用せずに新しいクライアント定義を作成するには

すべて既定の値で X クライアントへの接続を構成するには、この手順に従ってください。

- 1 X マネージャの左画面で、**[X クライアント]** の横にある **+** をクリックします。

- 2 **[クライアントの定義]** の **[名前]** に、この接続の分かりやすい名前を入力します。

---

注意 作業時に、変更は自動的に保存されます。

---

- 3 **[ホスト名]** に、X クライアントアプリケーションをホストするコンピュータの名前と IP アドレスを指定します。

- 4 ドロップダウンリストから **[ホストの種類]** を選択します。

---

注意 ホストの種類を変更すると、**[コマンド]**

ドロップダウンリストで使用できるサンプルクライアントコマンドのリストが変更されます。

---

- 5 **[接続方法]** の既定値は **[Secure Shell]** です。このオプションを選択したままにするか、ご使用のホストが SSH 接続に対応していない場合は別のオプションを選択します。

- 6 **[ユーザ名]** に、このホストでの自分のユーザ名を入力します。

- 7 **[アプリケーション]** の既定値は **[単一コマンド]** です。このオプションを選択したまま残します。

- 8 **[コマンド]** テキストボックスで、ドロップダウンリストから利用可能なオプション(下記参照)を1つ選択し、テンプレートとして使用できるオプションを1つ選択します。次にそれを編集して別のクライアントを起動するか、**[コマンド]** ボックスに直接クライアントコマンドを入力します。以下の点に注意してください。

- このサンプルコマンドではマクロが使用されますが、コマンドがホストに送信される時に、それらのマクロは適切な値に置き換えられます。例えば、%IP#% マクロはディスプレイホストの IP アドレスとディスプレイ番号に解決されます。
- サンプルコマンドは、コマンドにアンバウンドを追加して括弧で囲みます。コマンドをホストに送信する際、このコマンドはバックグラウンドのサブシェルで実行されます。この形式は、Telnet 接続でアプリケーションを継続実行する際にも必要な場合があります。括弧とアンバウンドは、ほとんどの接続で省略できます。

アプリケーション: 単一コマンド

コマンド: /usr/bin/xterm -fn 6x13 -sb -ls -display %IP#% &

xterm	(/usr/bin/xterm -fn 6x13 -sb -ls -display %IP#% &)
xclock	(/usr/bin/nohup /usr/bin/xclock -display %IP#% &)
gnome-terminal	(/usr/bin/gnome-terminal --display=%IP#% &)
gnome-session	(/usr/bin/gnome-session --display %IP#% &)
konsole	(/usr/bin/konsole --display %IP#% &)
startkde	(/usr/bin/startkde &)
Xsession	(/bin/bash -c 'export DISPLAY=%IP#%;find /etc/X11 -name Xsession -e...

- 9 このクライアントの起動時に開始する既定のセッションを **[セッション]** リストから選択します。

- クライアントアプリケーションをデスクトップ上で実行する場合は、**[クライアントをデスクトップに表示する]** に設定されたセッションを選択します。「My desktop」というサンプルセッションがこの設定を使用します。
  - クライアントコマンドでKDE、CDE、GNOMEなどのデスクトップ環境を起動する場合は、**[クライアントをX 端末風のデスクトップに表示する]** に設定されたセッションを選択します。「X 端末風のデスクトップ」というサンプルセッションがこの設定を使用します。これらのクライアントでは、**[常に新しいインスタンス上で起動]** も有効にします。
- 10 左画面でクライアント定義の名前をダブルクリックして、接続を開始します。

## クライアント定義の複製

既存のクライアント定義を複製して、コピーを作成できます。定義を複製することで、同じ設定で新しい定義を作成し、元の定義は参照用として保存しておくことができます。

### 既存の定義を複製して新しいクライアント定義を作成および編集するには

- 1 既存のクライアント定義を右クリックして、**[クライアントの複製]** を選択します。
- 2 複製された定義を編集します。変更は作業中に自動的に保存されます。次の例を示します。
  - サンプル定義のいずれかを使用した場合は、**[ホスト名]** と**[ユーザ名]** に静脈を追加すれば、接続するたびに入力する必要がなくなります。
  - **[ホストの種類]** の値を変更します。利用できるサンプルコマンドのリストも変更されます。
  - **[コマンド]** を編集して、別のXクライアントアプリケーションを起動します。ドロップダウンの矢印から、選択した種類のホストで通常動作するサンプルコマンドを確認します。
  - Reflection X Advantageの起動時にこのクライアントが起動するように設定するには、**[クライアントの自動起動]** を選択します。

## 別のユーザとのセッションの共有

ここで、ある同僚からプロジェクトで共同作業をしたいという連絡を受け、という状況を想定してみましょう。Reflection X Advantage のピアツーピアのセッション共有機能を使用すれば、これを簡単に実現できます。

単独モードでセッションを共有するには、両方のユーザが、それぞれのコンピュータでReflection X Advantageの単体のX マネージャを実行している必要があります。

### セッション共有をテストする2 台目のコンピュータを構成する

- 1 2 台目のコンピュータでインストールを実行します。
- 2 既定値を使用してインストールします。単体のX マネージャがインストールされます。このテストに必要なのは、X マネージャだけです。

### 共有セッションを設定するには

- 1 最初のコンピュータ (最初のテストセッションを作成したコンピュータ) でX マネージャを起動します。
- 2 **[X クライアント]** の下で、クライアントをダブルクリックして起動します (またはクライアントを選択してをクリックします)。
- 3 セッションが確立されたら、クライアントウィンドウでいくつか変更を行います。例えばxtermを起動している場合は、端末ウィンドウでlsなどのコマンドを入力します。

- 4 [Reflection X マネージャ] ウィンドウに戻ります。[セッションの定義] の下で実行中のセッションを選択します。次のアイコンで識別できます。
- 5 X マネージャウィンドウの右側の[セッションの状況] 領域で、[接続先の URL] から[共有] をクリックします。これにより、セッションが共有され、一意の接続先 URL が作成されます。
- 6 ここでは [セッションの制御をユーザに許可する] を選択します。
- 7 [URL のコピー] をクリックして、接続先の URL をクリップボードにコピーします。
- 8 メールメッセージに URL を貼り付けて、セッションを共有する相手に送信します。

これで、ほかのユーザは、以下に示す手順に従ってセッションに参加し、セッションを制御できるようになります。セッションは、そのセッションを終了するまで、または[共有しぬ] を選択して、現在のセッションの共有を停止し、セッションに参加している外部のユーザを切断するまで、使用可能な状態に維持されます。

## 2 番目のユーザとしてセッションに参加するには

- 1 2 台目のコンピュータで X マネージャを起動します。
- 2 ツールバーにある緑色の二重矢印の[参加] ボタンをクリックします



(または [操作] - [参加] を選択します)。

これにより、[セッションに参加] ダイアログボックスが開きます。

- 3 前の演習で作成した接続先の URL を貼り付けて、[OK] をクリックします。

このコンピュータ上に、起動したアプリケーションが表示され、セッションのウィンドウが開きます。これで、2 番目のユーザも最初のユーザのセッションの内容をすべて表示できます。[セッションの制御をユーザに許可する] を選択してセッションを構成したため、2 番目のユーザは共有セッションを制御できるようになります。以下に手順を示します。

## 2 番目のユーザとして共有セッションを制御するには

- 1 左のナビゲーション画面の[参加しているセッション] の下で、参加しているセッションの名前を見つけ、セッション名を右クリックします。
- 2 [制御の取得] を選択します。これで、共有セッションでキーボードとマウスを制御できます。
- 3 セッションのオーナーまたはほかの許可されているユーザは、それと同じ手順、つまり、セッション名を右クリックして [制御の取得] を選択することで、制御を取り戻すことができます。

## 低速ネットワークでのパフォーマンス向上

ネットワーク構成が原因で遅延が発生し、リモート X クライアントアプリケーションの実行が困難になった場合は、Reflection X Advantage のリモートセッションサービスを使用できます。単体の X マネージャからこの機能に対応するには、以下に示すように、X クライアントホストに [リモートセッションサービス] 機能をインストールします。

注意 以下の手順では単体の X マネージャを使用します。遅延の多さや帯域幅の問題に対処するために、X マネージャ (ドメイン接続用) を設定することもできます。Reflection X Advantage ドメインを設定すれば、X クライアントホストに Reflection X Advantage をインストールする必要があるなくても、この対応が可能です。ドメインの設定情報については、Reflection X Advantage ヘルプで「ドメインの設定 低速ネットワークでのパフォーマンス向上」を検索してください。

リモートセッションサービスが有効になっている場合、セッションを起動すると、Reflection X Advantage で2つのX サーバが作成されます。X サーバディスプレイがWindows ワークステーション(左下に表示)で実行され、2つ目の「ヘッドレスX サーバ」がX クライアントホスト(右側に表示)で実行されます。遅延の多いネットワークの場合、この構成によってネットワーク上のデータ交換が短絡化され、パフォーマンスが向上します。ヘッドレスX サーバがクライアントホスト(または近くのホスト)で実行されていると、ディスプレイを変更しないクライアントサーバ間のデータ交換がクライアントとヘッドレスX サーバの間で行われますが、これがワークステーションのX サーバディスプレイにネットワーク経由で送信されることはありません。これでラウンドトリップネットワークメッセージの数が削減されるため、ワークステーションでの応答時間を大幅に短縮できます。また、ネットワークの帯域が狭い場合に、リモートセッションとX サーバディスプレイの間のプロトコルが圧縮されます。



最初の手順ではX クライアントホストにリモートセッションサービス機能をインストールして、この種の機能に対応します。

#### 設定を始める前に

- ご使用のUNIX ホストへのX クライアントの接続をテストする場合は、「X クライアントの起動」(10 ページ)の手順に従ってください。この後の手順では、リモートセッションサービス機能を使用して、クライアント定義を変更します。

#### リモートセッションサービスに対応するためのX クライアントホストの構成

- 1 ダウンロードライブラリページに戻り、X クライアントを実行しているUNIX システム用のパッケージをダウンロードし、このファイルをX クライアントホストにコピーします。
- 2 ダウンロードファイルを解凍します。例

```
unzip rx-advantage-5.0.nnn-eval-linux.zip
```

展開されたダウンロードファイルには、さまざまなプラットフォームにインストールするためのバイナリファイル(\*.bin)が含まれています。UNIX プラットフォームに適したファイルを確認します(rxa\_help で始まるファイルは不要です。このファイルは、この構成で使用されないオプションのローカルのヘルプファイルをインストールするものです)。

- 3 ルートとしてログオンし、インストールファイルを含んでいるディレクトリまで移動します。
- 4 インストールパッケージの権限を変更して実行権限を与えます。例えば、次のように入力します。

```
chmod 744 rxa-5.0.0.nnn-eval-i586-linux.bin
```

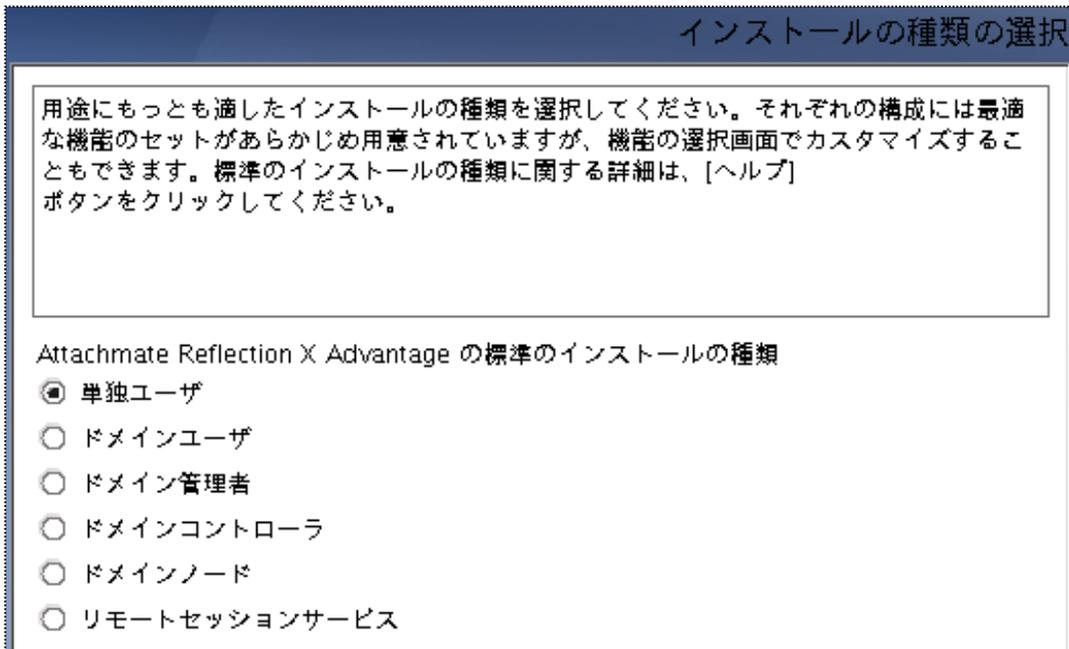
- 5 インストールプログラムを起動します。例
- ```
./rx-5.0.0.nnn-eval-i586-linux.bin
```

---

注意 上記のコマンドは、X11 Windows ディスプレイが必要なInstallAnywhere インストールプログラムを起動します。グラフィカル表示を使用できない場合は、コンソールモードでインストールが実行されます。

---

- 6 **【インストールの種類選択】**画面が表示されたら、**【リモートセッションサービス】**を選択します。



- 7 既定値を使用してインストールを完了します。

次の手順では、リモートセッションサービス機能のテストに使用できる新しいセッションの定義を作成します。

#### リモートセッションサービスを使用する新しいセッション定義の作成

- X クライアント定義を作成してテストしたWindows コンピュータに戻り、X マネージャを起動します。
- 【セッションの定義】**から、**+** をクリックして新しいセッションを作成します。**【セッション名】**に「RSS Session」と入力します。
- ご使用のX クライアントに適した表示オプションを選択します。
  - クライアントアプリケーションをデスクトップ上で実行する場合は、**【クライアントをデスクトップに表示する】**を選択します。
  - クライアントコマンドでKDE、CDE、GNOMEなどのデスクトップ環境を起動する場合は、**【クライアントをX 端末風のデスクトップに表示する】**を選択します。
- (オプション) クライアントの終了時にセッションを停止させたい場合は、**【最後のセッションでの操作】**を**【セッションを停止する】**に変更します。
- 【リモートセッションサービス】**の下で以下の手順を実行します。
  - 【遅延の多いネットワークのパフォーマンス】**を選択します。
  - 【ホスト名】**に、リモートセッションサービス機能をインストールしたX クライアントホストの名前を指定します。
  - 【ユーザ名】**と**【パスワード】**に、X クライアントホストでの自分の資格情報を指定します。

次の手順では、この新規セッションを使用してクライアントの接続を設定します。

#### 新規セッションを使用してクライアントの起動とセッションの接続情報の確認

- X マネージャの**【X クライアント】**の下で、X クライアントの定義を選択します。

- 2 **[既定セッション]** ドロップダウンリストで、先ほど構成した「RSS Session」を選択します。
- 3 X クライアントの定義をダブルクリックして、ホストにログオンします。X クライアントのディスプレイが表示されます。
- 4 X マネージャの**[セッションの定義]**の下で**実行中のセッション**を選択します。次のアイコンで識別できます。 
- 5 **[セッションの状況]**画面で**[X サーバ]**セクションを確認します。ネットワークの遅延状況によって、1つか2つのX サーバが表示されます。
  - 遅延問題がない場合は、X ディスプレイサーバが1つ表示されます (X マネージャのワークステーションで実行されているもの)。この場合、すべてのプロトコルはこのX サーバディスプレイに直接送られます。
  - 遅延問題になっている場合は(10 ms を超える場合)、2つのサーバが表示されます。X マネージャのワークステーションで実行されているディスプレイサーバと、UNIX ホストで実行されている2番目の「ヘッドレスサーバ」です。この構成では、多くのプロトコルエラーを短絡化することでパフォーマンスが改善されます。ワークステーション上のX サーバディスプレイにネットワーク経由で渡す必要のあるラウンドトリップ数とデータ量が削減されます。

## ショートカットの作成

### Windows

実行している場合は、デスクトップショートカットを作成してクライアントを起動することができます。以下の例では、X クライアント定義のショートカットを作成します。ほかの種類の定義を起動する場合も、同じ方法でショートカットを作成できます。

#### ショートカットを作成するには

- 1 X マネージャの**[X クライアント]**の下で定義を右クリックし、**[ショートカットの作成]**を選択します。デスクトップにショートカットが作成されます。
- 2 [X マネージャ] ウィンドウを閉じます。
- 3 新しいショートカットを使用してセッションを起動します (X マネージャが起動し、バックグラウンドで動作します。システムトレイのX マネージャアイコンを右クリックして、[X マネージャ] ウィンドウを開くことができます)。

---

注意 管理者は、新しいユーザが簡単に起動できるように、ショートカットを構成し、配布することができます。単体のX マネージャ (rxmgr.exe) およびX マネージャ (ドメイン機能) (rxmgrdomains.exe) を起動するためのコマンドラインユーティリティについては、Reflection X のヘルプに記載されています。

---

## ドメインモードの使用

単独モードでX マネージャを使用してセッションを開始し作業する方法について確認しました。次に、Reflection X Advantage をドメインモードで実行した時に使用可能ないくつかの高性能機能のメリットについて確認してみましょう。機能には、管理者と個別のユーザの両側面から見たメリットがあります。

管理者として、以下のことが可能になります。

- 設定を構成して、ドメインのユーザが利用できるように公開可能です。エンドユーザが要求するすべての設定を一元的に制御および管理できます。
- 低速ネットワークでのセッションの継続や改善されたパフォーマンスのようないくつかの利点がある分散型セッションを構成できます。

- 確立済みの認証システムをドメインへのアクセスの制御にそのまま利用できます。
- ドメイン内のコンピュータの負荷分散を構成して、システムリソースを最大限に利用することができます。
- ドメイン内で実行中のすべてのセッションの状況を表示したり、ドメインのシステムリソースを表示したりできます。

ユーザとして、以下のことが可能になります。

- セッションを起動し、セッションから抜け、X マネージャを閉じて、後で同じコンピュータまたは別のコンピュータからセッションに参加することができます。
- 管理者によって提供される公開定義を使用して、事前定義済みのセッションを実行したり、カスタマイズした独自の個人用セッションを作成して実行したり、その両方を行うことができます。
- ドメイン内のほかのユーザと簡単にセッションを共有できます (単独モードでは URL をほかのユーザに送信してセッションを共有する必要があります。ドメインモードでは URL の交換は不要です)。

## サンプルドメインの設定

### 手順1: Reflection X Advantage のインストール

この評価では、2 台のコンピュータを使用します。

- **コンピュータ 1:** この評価では、コンピュータ 1 はドメインコントローラと管理者のワークステーションの両方になります。このコンピュータに Reflection X Advantage のすべての機能をインストールします。前の演習を実行した場合、このコンピュータはすでに構成されています。このコンピュータの名前 (または IP アドレス) を書き留めてください。これは Reflection X ドメイン名です。
- **コンピュータ 2:** これは、ユーザワークステーションです。このコンピュータに X マネージャ (ドメイン継続) をインストールします (この機能は既定ではインストールされません)。セッション共有をテストするためにこの 2 番目のコンピュータに X マネージャがインストールされている場合は、X マネージャ (ドメイン継続) を含むようにそのインストールを変更することができます。

---

注意 すべての Windows システムで、インストールする機能を選択するときに **Java ランタイム環境 (JRE)** 機能が含まれていることを確認してください。

---

### 手順2: ユーザアカウントの識別

Windows ドメインでテストしている場合は、Windows ユーザアカウントを使用して評価することをおすすめします。有効な Windows アカウントは、Windows 資格情報を使用して Reflection X Advantage ドメインに認証できます。この認証オプションを使用して評価するには、次のように 2 つの異なる Windows アカウントにアクセスできる必要があります。

- **ドメインの管理者アカウント:** 管理者アカウントとして自分の Windows 資格情報を使用できます。
- **ドメインのユーザアカウント:** サンプルユーザアカウントの場合は、Windows ドメインにテストユーザアカウントを作成します (または、ドメイン内の別のユーザの資格情報を取得します)。

---

注意 2 つの異なる Windows ドメインアカウントにアクセスできない場合は、「Reflection X 内蔵認証の使用」(20 ページ) を参照してください。この手順では、Reflection X 内蔵認証オプションを使用してユーザを追加および認証する方法を説明しています。

---

### 手順3: ファイアウォールの構成

ファイアウォールを実行中の場合は、Reflection X Advantage で使用するポートにファイアウォールを構成します。詳細については、Reflection X Advantage ヘルプを開いて、[検索] タブで「ファイアウォール」を検索してください。

## 管理コンソール

ドメインモードでは、すべてのセッション情報がドメインコントローラで集中管理されます。この画面では、ドメインコントローラがすでにコンピュータ 1 (すべての機能をインストールしたコンピュータ) で起動し、動作しています。

### 管理コンソールの起動とログオン

- 1 コンピュータ 1 から、X 管理コンソールを開きます。

[スタート] - [すべてのプログラム] - [Micro Focus Reflection] - [X 管理コンソール- Reflection X Advantage]

ログオンダイアログボックスが表示されます。ドメインモードで実行している時は、常に、最初に Reflection X Advantage ドメインにログオンします。

- 2 ログオンダイアログボックスの[ユーザ名] と[パスワード] に、コンピュータのログオンに使用するものと同じ名前とパスワードを入力します。[ドメイン] フィールドに、コンピュータの名前を入力します。

---

注意 Reflection X Advantage  
ドメイン名は、常に、ドメインコントローラを実行しているコンピュータの名前になります。

---

ドメインへのログオンに成功すると、コンソールウィンドウの最上部にドメイン名が表示されます。



## 認証

X 管理コンソールの[認証] タブのクイックツアーを利用すると、Reflection X Advantage ドメイン内のユーザの管理が簡単であることを理解できます。以下に2つの認証演習があります。最初のオプションを使用してテストする場合は、2つの異なる Windows ドメインユーザのログオン資格情報にアクセスできる必要があります。複数のドメインの資格情報にアクセスできない場合は、Reflection X Advantage の内部認証を使用できます。

## Windows 資格情報を使用した認証

Windows を実行しており、2 つの Windows ドメインアカウントにアクセスできる場合は、この手順を使用します (複数のアカウントにアクセスできない場合は、「Reflection X 内部認証の使用」(20 ページ) を参照してください)。

Windows ドメイン内のコンピュータに Reflection X Advantage をインストールする場合、Windows 資格情報を使用してログオンが成功すれば、ユーザは Reflection X Advantage ドメインにアクセスできます。この演習では、サンプルユーザの認証をテストしてこの動作を確認します。実際のインストールでは、それ続くユーザは、Windows 資格情報を使って Reflection X Advantage ドメインへのログオンに成功した時に自動的に追加されます。

### Windows 資格情報を使用して認証テストするには

- 1 管理コンソールの左側に並んでいるタブの中から、**[認証]** をクリックします。以下の点に注意してください。
  - ユーザアカウントの一覧ですでに自分の名前が表示され、**[管理者]** の下にあるチェックボックスがオンになっています。既定では、最初ログオンしたユーザは、Reflection X ドメインの管理者として設定されます。
  - Windows システムでは、既定で **[認証システム]** が「Windows」に設定されています。
- 2 現在構成されている Windows ドメインを表示するには **[構成]** をクリックします。何も変更を行わずにダイアログボックスを閉じるには **[キャンセル]** をクリックします。**[正常ログオンした後、ユーザアカウントを自動的に作成する]** が選択されている場合 (既定)、この Windows ドメインに認証できるすべてのユーザが自動的に Reflection X ドメインに認証できます。
- 3 **[認証のテスト]** をクリックします。**[ユーザの認証のテスト]** ダイアログボックスで、サンプルユーザアカウント (現在の Windows ドメインにアクセスできる任意のユーザアカウント) のユーザ名とパスワードを入力して、**[テスト]** をクリックします。  
認証に成功すると、そのユーザが **[ユーザアカウント]** リストに自動的に追加されます。

評価を続けるには、「公開セッション設定の作成および使用」(21 ページ) に進んでください。

## Reflection X 内部認証の使用

Reflection X 内部認証を使用して任意の環境でテストすることができます。この認証オプションでは、手動でユーザを追加し、パスワードを設定する必要があります。

---

注意 初めてドメインにログオンしたとき管理者アカウントが作成されますが、認証は Windows (または UNIX システム上の PAM) によって処理されるため、内部認証データベースにはこのアカウント用のパスワードの登録がありません。

---

### 内部認証システムを使用して管理者およびユーザアカウントを構成するには

- 1 管理コンソールの左側に並んでいるタブの中から、**[認証]** をクリックします。
- 2 **[認証システム]** を **[内部]** に設定します。
- 3 既存のアカウント名を選択し、 をクリック (または **[操作] - [ユーザパスワードの設定]** を選択) し、このアカウント用のパスワードを入力します。これは内部認証データベースに保存されます (**[管理者]** の下にあるこのアカウント用のチェックボックスがすでにオンになっている必要があります)。
- 4  をクリック (または **[操作] - [新規ユーザ]** を選択) し、この演習用の追加サンプルユーザの名前とパスワードを入力します。
- 5 コンソールを閉じる前に、管理アカウントを使用してログオンできることを確認します。確認するには **[認証のテスト]** をクリックし、管理者アカウントの名前とパスワードを入力し、**[テスト]** をクリックします。  
「認証に成功しました。」というメッセージが表示されます。

## 公開セッション設定の作成および使用

管理者は Reflection X

ドメインを使用して公開セッション設定を作成することができます。これは、迅速かつ簡単にユーザをアクティブ化でき、トレーニングやサポートにかかる時間や費用を削減できることを意味しています。

2 台のコンピュータを使用します。

- **コンピュータ 1** (すべての機能がインストールされているコンピュータ)  
が管理者用ワークステーションとドメインコントローラです。このコンピュータでは、X マネージャ (ドメイン接続用) を使用して、設定を構成およびテストし、次に、Reflection X 管理コンソールを使用してこれらの設定をほかのドメインユーザが使用できるようにします。
- **コンピュータ 2** (X マネージャ (ドメイン接続用) のみがインストールされているコンピュータ)  
はユーザ用ワークステーションです。このコンピュータでは、X マネージャ (ドメイン接続用) により、公開セッションを使用して接続します。

### X マネージャ (ドメイン接続用) の開始

公開クライアント定義とセッション定義を構成するには、X マネージャ (ドメイン接続用)

を使って作業を開始します。単体の X マネージャの使用経験があれば、これは慣れ親しんだ領域といえるでしょう。

#### X マネージャ (ドメイン接続用) を起動してクライアント定義を作成するには

- 1 コンピュータ 1 (すべての機能がインストールされているコンピュータ) から、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します。  
**[スタート] - [すべてのプログラム] - [Micro Focus Reflection] - [X マネージャ (ドメイン接続用) - Reflection X Advantage]**
- 2 管理者アカウントの資格情報を使用してログオンします (Windows 認証でテストしている場合は、Windows での自分の名前とパスワードを使用します。Reflection X 内部認証を構成した場合は、管理者アカウント用に設定したユーザ名とパスワードを使用します)。**[ドメイン]** フィールドに、自分のコンピュータの名前を入力します。
- 3 **[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスで、インポートする設定を選択します。
- 4 X クライアント定義を作成してテストします。この手順は単体のクライアントの場合と同じです。[X クライアントの起動] (10 ページ) を参照してください。この接続では、クライアント定義の**[ユーザ名]** には何も入力しないでください。次の演習では、このセッションをほかのユーザと共有します。**[ユーザ名]** を空白にしておくと、各ユーザに自分のユーザ名を入力するように求めるプロンプトが表示されます。
- 5 X クライアントをログオフする、または実行中のセッションを選択して、X マネージャ (ドメイン接続用) のツールバーにある赤いセッション停止ボタン  をクリックします。

次の手順では、管理コンソールを使用して、このクライアント定義をほかのユーザと共有する方法について学習します。

---

#### 注意

管理コンソールを使用して新規のクライアントを作成することもできます。ただし設定を公開する前は接続をテストできるため、通常は X マネージャ (ドメイン接続用) を使用することをおすすめします。

---

### 設定の公開

設定を構成し終えたら、これらの設定をドメイン内の任意のユーザが使用できるようにすることができます。これを行うには、管理コンソールを使用します。

---

**注意** クライアント定義とセッション定義の両方を公開する必要があります。

---

## 設定を公開するには

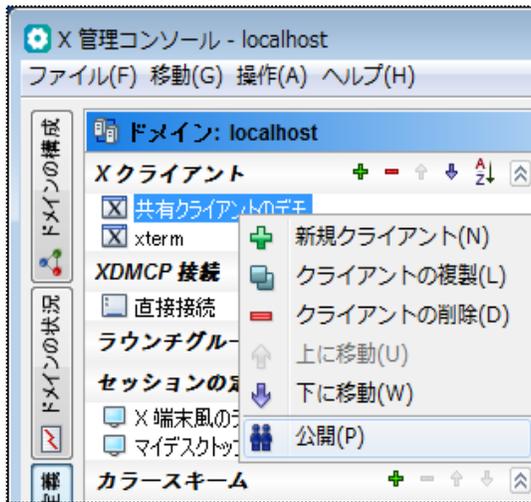
- 1 セッションを作成するのに使用したのと同じコンピュータ (コンピュータ 1) から、X 管理コンソールを起動します。

[スタート] - [すべてのプログラム] - [Micro Focus Reflection] - [X 管理コンソール- Reflection X Advantage]

- 2 管理者の資格情報を使用してログオンします。
- 3 [ドメインの定義] タブをクリックします。[X クライアント] の下に、先ほどテストしたクライアント定義があることを確認します。

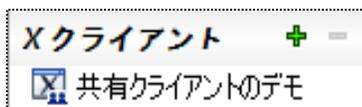
この段階では、このクライアントはまだ個人用です。個人用クライアント定義は、その定義を作成したユーザのみが表示、使用、変更できます。個人用クライアントは以下の記号で識別します。 

- 4 クライアント定義の名前を右クリックして、[公開] を選択します。



ドメインにログインしているすべてのユーザが公開クライアントを使用できますが、変更できるのは管理者だけです。公開クライアントは以下の記号で識別します。 

クライアント定義は、以下のような公開定義アイコンが表示されます。



- 5 X セッションの下で、このクライアントが使用するセッション定義を右クリックして、この定義を公開します。ここに示すように、セッション定義のアイコンが変化して、その定義が公開されたことが示されます。



- 6 (オプション) クライアントで Secure Shell 接続を使用している場合は、ホスト鍵を公開できます。これにより、ユーザが**[不明なホスト鍵]** ダイアログボックスに回答しなくても、管理者はホストが正しく認証されていることを確認できます。接続をテスト済みの場合は、ホスト鍵のコピーがすでにドメインデータベースにあります。鍵を公開するには、左画面でスクロールダウンして**[信頼されているホスト鍵]** を表示させます。ホスト鍵を右クリックして**[公開]** を選択します。鍵アイコンが変更されて、公開ホスト鍵となります。



## 公開設定での新規ユーザの開始

設定はすべて完了しました。ここで、ホストアプリケーションの利用を開始する必要がある新規のユーザから連絡を受けた、という状況を想定してみましょう。作成した公開定義を使えば簡単です。

新しいユーザが知っておく必要があるのは、ドメインの名前とクライアント定義、および UNIX ホストのログイン資格情報だけです。

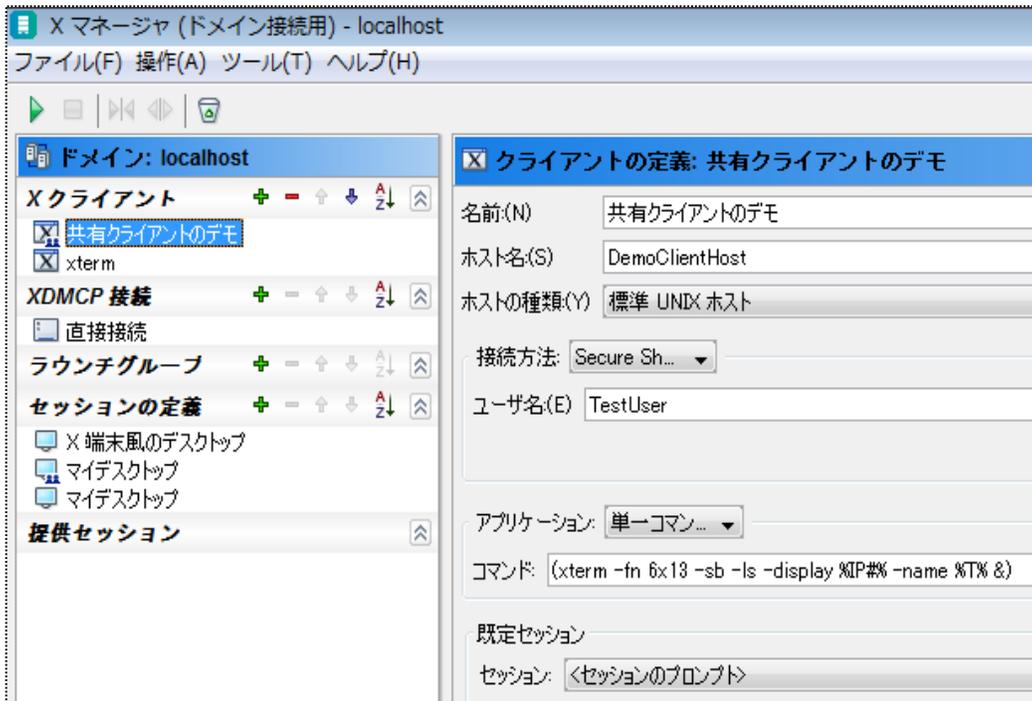
### ユーザ公開セッションを起動するには

- 1 ユーザのコンピュータ (コンピュータ 2) で、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します (**[スタート] - [すべてのプログラム] - [Micro Focus Reflection] - [X マネージャ (ドメイン接続用) - Reflection X Advantage]**)。
- 2 テストユーザの資格情報を使ってログオンします。**[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスの**[キャンセル]** をクリックします。この初回のログオン時は、ユーザは X ドメインの名前を知っている必要があります。初回のログオンに成功した後は、使用可能なドメイン名のリストにそのドメイン名が表示されるようになります。
- 3 **[X クライアント]** の下に、公開 X クライアント定義 (この例では「Shared client demo」) と既定の設定が表示されます。ユーザは個人用定義を編集できますが、公開定義は編集できません。

---

注意 ユーザに公開定義のみが表示されるようにしたい管理者は、Reflection X Advantage のインストールを変更して、サンプルテンプレートが含まれないように設定できます。

---



- 4 公開X クライアントを選択して、 をクリックします(または[操作 - 起動] を選択します)。すでに構成およびテスト済みの接続が確立されるため、サンプルユーザはすぐにアクティブ化されます。

## ドメインモードでのセッションの共有

前の演習では、ユーザがホスト上の新規セッションに簡単にアクセスする方法について学習しました。ここでは、サンプルユーザが、現在熱心に取り組んでいる業務の一部を管理者ユーザが提示する場合を想定します。X マネージャ(ドメイン接続用)を実行中のすべてのユーザは、同じドメインに属しているほかのユーザと簡単にセッションを共有できます。

次の手順では、ドメインモードでのセッション共有の動作を示します。

### 別のユーザにセッションの使用を許可

この例では、サンプルユーザが実行中のセッションを別のユーザと共有する方法について説明します。実行中のセッションをドメインモードで共有するには、**許可されているユーザ** 一覧に1人以上のユーザを助するだけです。

#### X マネージャ(ドメイン接続用)でセッションを共有するには

- 1 ユーザのコンピュータ(コンピュータ2)で、X マネージャ(ドメイン接続用)を起動します。この演習では、テストユーザアカウントの資格情報(管理者アカウントではない)を使用してログインします。セッションを共有するのに管理者である必要はありません。
- 2 前の演習の公開クライアント定義を起動するか、新しいクライアント定義を構成して起動し、使用するXクライアントアプリケーションを起動します(セッション共有に対応するために、クライアント定義とセッション定義が公開されている必要はありません)。
- 3 X マネージャ(ドメイン接続用)ウィンドウの**[セッションの定義]**の下で実行中のセッションを選択します。次のアイコンで識別できます。

アクティブなセッションに関する情報のほかに、**許可されているユーザ** という構成可能な領域があります。



- 4 **許可されているユーザ** の右側の緑色のプラス記号 (+) をクリックします。
- 5 **ユーザとの共有** ダイアログボックスに、管理者ユーザ (ほかのユーザアカウントもテストしている場合はほかのユーザも) の名前が表示されます。この一覧から管理者ユーザ名を選択し、**OK** をクリックします。  
選択した名前が**許可されているユーザ** リストに表示されます。
- 6 (オプション) **セッションの制御をユーザに許可する** を選択します。

これで、管理者用ワークステーション (コンピュータ 1) からセッションに参加できるようになります。

## 提供セッションへの参加

上記の演習では、サンプルユーザによって共有セッションが提供されました。このセッションを表示するには、以下の手順を実行します。

### 提供セッションに参加するには

- 1 コンピュータ 1 で、Reflection X マネージャ (ドメイン接続用) を起動し、管理者の資格情報を使ってドメインにログインします。
- 2 **提供セッション** の下で、ユーザのコンピュータから共有された実行中のセッションを見つけます (ユーザのワークステーションのコンピュータ名を使用して識別されます)。その提供セッションを右クリックして、**参加** を選択します。



- 3 新規セッションウィンドウが開きます。これで、2 番目のユーザとして、最初のユーザのセッションの内容をすべて表示できます。

## セッションの制御取得

セッションのオーナーが、**セッションの制御をユーザに許可する** がオンに設定されたセッションへユーザを起動するたびに、そのユーザは **提供セッション** の下のセッション名を右クリックして、**制御の取得** を選択するだけでセッションの制御を取得できます。

セッションのオーナーまたはほかの許可されているユーザは、それと同じ手順、つまり、セッション名を右クリックして **制御の取得** を選択することで、制御を取り戻すことができます。

## ドメインモードでのリモートセッションサービスの使用

ドメインモードでリモートセッションサービスを使用する場合、Reflection X Advantageにより分散セッションが作成されます。つまり、一部のセッションコンポーネントは、X マネージャ (ドメイン接続) を実行しているワークステーションではなくリモートドメインノードで実行されます。この構成では、以下の機能を含む、基本セッションでは使用できない一部の機能を使用できます。

- セッションをサスペンドおよび再開する。
- 遅延の多いネットワークや帯幅の狭いネットワークでパフォーマンスを向上する。
- 電源やネットワークの障害が原因でワークステーションが切断された場合でもセッションの実行を継続するためのフェイルオーバー。

これらのオプションに対応するためには、次の手順に従ってドメインノードを構成する必要があります。

### ドメインノードの設定

ドメインノードを構成するには、**[ドメインサービス]** という機能をインストールする必要があります。この評価では、この機能をすでにインストールしたコンピュータ 1 にノードを作成します。実際のドメインを計画している場合、X クライアントを実行する UNIX ホストなど、任意の対応システムノードを作成できます。

#### ドメインノードを構成するには

- 1 コンピュータ 1 (すべての機能がインストールされているコンピュータ) から、コマンドプロンプトウィンドウを開きます (**[スタート]** - **[すべてのプログラム]** - **[アクセサリ]** - **[コマンドプロンプト]**)。

---

注意: XP よりも新しいすべての Windows

システムでは、管理者としてコマンドプロンプトを実行することを指定する必要があります

(この手順は、管理者としてすでにログインしている場合でも必要です)。これを行うには、**[スタート]** メニューで **[コマンドプロンプト]** ショートカットを右クリックし、**[管理者として実行]** を選択します。

---

- 2 次のコマンドを入力します。ここで、「domainname」はドメインコントローラを実行しているコンピュータ (コンピュータ 1) の名前です。

```
rxsconfig join domainname
```

- 3 管理者の資格情報を求められます。Reflection X Advantage のドメイン管理者のユーザ名とパスワードを入力します。以下の例に示すように、ノードが作成されたことを示すメッセージが表示されます。

```
C: >rxsconfig join domainname
Initializing crypto library...
Performing the join...
Administrative user for domain: joe
Password:
Created node 0.0.0.0: 22001 for domain domainname.
```

- 4 コンピュータ 1 で、X 管理コンソールを起動し、ドメイン管理者の資格情報を使用してログオンします。
- 5 **[ドメインの構成]** サイドタブをクリックします。  
**[登録済みのノード]** の下に作成したノードが表示されます。

## リモートセッションサービスを使用したリモート作業

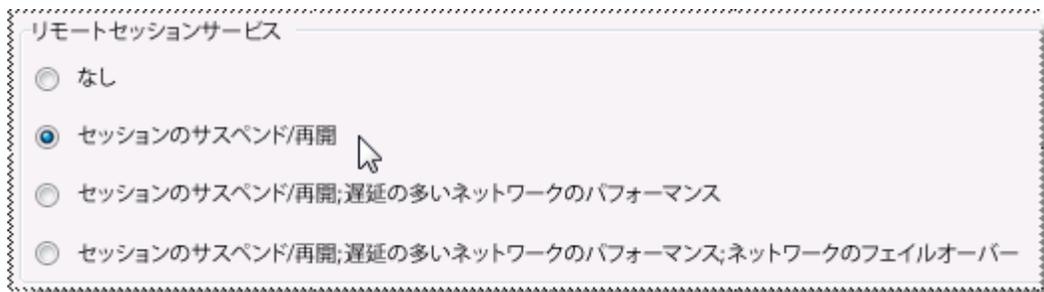
ほかのユーザと共同で作業しない場合でも、Reflection X Advantage リモートセッションサービスから得られるメリットがあります。自宅のコンピュータと仕事先のコンピュータの両方から同じ X セッションを使用すると仮定します。コンピュータ間の移行がシームレスに行われるとともに、セッションを終了せずに自宅のコンピュータをシャットダウンできるようにします。

これ以降の手順は、これまでのシナリオで学習し作成した内容に基づいています。この演習では次のように仮定します。

- コンピュータ 1 (すべての機能はインストールされ、ドメインノードが構成されている) は「仕事先」のコンピュータです。以下の手順を実行する前に、このコンピュータでドメインノードを設定 (26 ページ) してください。
- コンピュータ 2 (X マネージャ (ドメイン接続用) がインストールされている) は「自宅」のコンピュータです。

### 片方のコンピュータでセッションから抜けてもう片方のコンピュータでセッションを再開するには

- 1 両方のコンピュータで、実行されているセッションがどれも停止して、すべての Reflection X Advantage アプリケーションを閉じます。
- 2 仕事先のコンピュータ (コンピュータ 1) で、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動し、管理者の資格情報を使ってドメインにログオンします。
- 3 **[セッションの定義]** から、**+** をクリックして新しいセッションを作成します。**[セッション名]** に「Suspend test」と入力します。
- 4 ご使用の X クライアントに適した表示オプションを選択します。
  - クライアントアプリケーションをデスクトップ上で実行する場合は、セッションを **[クライアントをデスクトップに表示する]** に設定します。
  - クライアントコマンドで KDE、CDE、GNOME などのデスクトップ環境を起動する場合は、**[クライアントを X 端末風のデスクトップに表示する]** にセッションを設定します。
- 5 (オプション) クライアントの終了時にセッションを停止させたい場合は、**[最後のセッションでの操作]** を **[セッションを停止する]** に変更します。
- 6 **[リモートセッションサービス]** の下で **[セッションのサスペンド/再開]** を選択します。



- 7 **[X クライアント]** の下にあるテスト済みのクライアント定義を選択します。**[既定セッション]** の下で、作成した「Suspend test」セッションを選択します。
- 8 クライアント定義をダブルクリックして、新しいセッションを使用してこのクライアントを起動します。クライアントホストにログオンして、クライアントアプリケーションと対話します (例えば xterm クライアントを起動した場合は ls コマンドを入力します)。
- 9 **[セッションの定義]** の下で実行中のセッションを右クリックし、**[セッションから抜ける]** を選択します。このセッションのアイコンが変化し、セッションディスプレイが表示されなくなることがわかります。
- 10 X マネージャ (ドメイン接続用) を閉じます。  
セッションは表示されなくなりますが、ドメインノードで引き続きアクティブに実行されます。

- 11 自宅のコンピュータ (コンピュータ 2) に切り替えて、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します。仕事先のコンピュータでログオン時で使用したのと同じユーザ名、パスワード、およびドメイン名を使用してログオンします。  
樹ガはばかりの実行中のセッションが、「Suspend test」セッション定義の下に表示されます。
- 12 実行中のセッション名を右クリックして **[参加]** コマンドをクリックします。  
実行中のままにして樹ガアプリケーションはそのまま表示されています。最初から接続を確立し直したり、開始した作業をやり直したりする必要はありません。
- 13 仕事先に戻るまでこの作業が完了していないと想定して、自宅のコンピュータで **[セッションから抜ける]** ボタンをクリックします。これで、自宅のコンピュータをシャットダウンできるとともに、仕事先に戻って引き続きセッションに再参加できるようになります。

---

注意 X マネージャ (ドメイン接続用) を実行している場合は、自分だけが使用できる個人用セッションまたはほかのユーザと共有する公開セッションのいずれについても、リモートセッションサービスを使用するようセッションを構成できます。

---

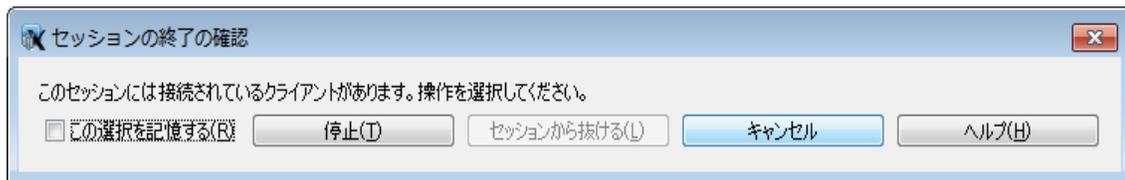
## 特別なセッション保護の適用

前の演習では、セッションをサスペンドし、別のコンピュータからセッションに再参加する方法を示しました。その演習の構成では、ドメインノードが仕事先のコンピュータで実行されているため、仕事先のコンピュータを動作したまましておく必要がありました。作業中のコンピュータでネットワーク接続が切れたり、予期せずシャットダウンしたりした場合でもセッションに戻ることができる、より高度なセッション保護を提供するように、Reflection X Advantage を構成することができます。

このレベルのセッション保護を提供するために、Reflection X Advantage はリモートドメインノード上にセッションを維持します。リモートノードは Windows システムでも UNIX システムでも構いません。リモートドメインノードを構成するときは、リモートシステムで Reflection X Advantage インストーラを実行し、**(ドメインコントロール 機能を含めず) [ドメインサービス]** という機能を選択します。この機能をインストールしたら、rxsconfig コマンドラインユーティリティ ([26 ページ](#)) を使用して、このコンピュータにドメインノードを作成できます。

リモートドメインノードが使用できる場合は、**[リモートセッションサービス]** の下にある **[セッションのサスペンド再開、遅延の多いネットワークのフォーマンズ、ネットワークのフェイルオーバー]** オプションを選択することができます。

このオプションを使用すると、セッションの実行中に X マネージャ (ドメイン接続用) を閉じた場合に、以下のプロンプトが表示されます。



### **[セッションから抜ける]**

を選択した場合、このコンピュータをシャットダウンしても、セッションはリモートノードでアクティブのままです。この Reflection X Advantage ドメインにアクセス可能な任意のコンピュータから X マネージャ (ドメイン接続用) を起動すると、セッションに再度参加することができます。

### **[ネットワークのフェイルオーバー]**

を使用してセッションを構成している場合、コンピュータが予期せずシャットダウンし、**[終了の確認]** プロンプトに回答できなくても、リモートドメインノードを実行しているコンピュータがシャットダウンされない限り、セッションはアクティブのままです。

## ネットワークパフォーマンスの最適化

### Reflection X Advantage

ドメインモードは、単独モードと同様に、高遅延または低帯域幅による遅延のためにリモートのXクライアントアプリケーションを実行するのが困難になるネットワークでのパフォーマンスを大幅に改善するよう構成できます。

詳細については、Reflection X Advantage のヘルプを開いてください(ヘルプ-ヘルプの目次)。目次タブから、「ドメインの管理」、「サンプルドメインの構成」、「ドメインの設定 低速ネットワークでのパフォーマンス向上」に進みます。

## Reflection X バージョン13 または14 からのアップグレード

初めてX マネージャまたはX マネージャ(ドメイン接続用)を起動すると、従来のReflection X 製品(v. 13 または14) からローカル設定が自動的に移行され、Reflection X 定義ファイル(\*.rxd) に保存されます。従来のReflection X ファイルは変更されません。この最初の起動時に、**[移行された設定とテンプレートをインポートする]** ダイアログボックスが開き、移行された設定をインポートするオプションが表示されます。既定では、このオプションは選択されています。**[インポート]** をクリックして、Reflection X Advantage に設定をインポートします。

**[X クライアント]** か **[XDMCP 接続]** (または両方) の下に Reflection X クライアントファイル(\*.rxc) が定義としてインポートされます。移行されたこれらのクライアントは、以下のようにして簡単に起動できます。

- 移行された定義をダブルクリックする。

または

- 定義を選択して、次のスタートボタンをクリックする。



以前のバージョンのサーブ設定が、「config」という名前のセッション定義で移行されます。これはX マネージャの起動時に自動で開始されるよう構成されます。